

いる。このユニークな特徴を設定したのがガレノスであり、そのありさまが本書では克明に描かれている。

第二の主題は、養生と治療と薬学の位置づけである。これはガレノス自身がかつとも膨大な大著を残した分野であると同時に、ヨーロッパの医療の実践としては19世紀中葉にいたるまで瀉血や下剤などの形で最後まで残った分野であった。ガレノスは、自然世界の四大元素と人体の四体液を対応させた。そして、世界や環境の様子、人体の健康と疾病の意味、健康を保つ養生の原理、治療における瀉血や下剤の効用や薬物の効用などを、諸原理の対応と関連させて論じた。東地中海の各地から、ガレノスは珍しい動植物や鉱物を収集して、アスファルト、インドのクコ、キプロスの黄鉄鉱などを薬物の中に入れていく一方で、個々の薬物の効用を経験だけで憶えるのは否定された。四大元素や四体液に関連付けられた原理的な説明が必要なのである。これとともに、養生・治療・薬物の世界が、意味合いを持つ世界になる方向性が作られた。この世界観は、キリスト教と緊張を含んで共存しながら大きな意味を持つことになる。

第三の主題は、養生などの原理性と深く関係することだが、医者と患者との関係である。ガレノスの理念的な患者は、ローマ帝国の貴族や皇帝のマルクス・アウレリウスなどを軸とする支配階級の人々であった。優れた上流階級の知的な人々が患者となった場合に、その人々の尊敬を得ることができる医療が、ガレノスの目標であり、他の医者と競合して富裕で知的な患者を獲得することが、ガレノス医学の特徴であった。ガレノスが当時の論理学・修辭学・自然哲学の効果を療法に組

み入れることも、上流階級からの評価ということと他の医者との論争でわかる。それと並行して、この時期にローマ帝国で流行が始まった天然痘などによる〈人口〉の甚大な被害は、ガレノスの医療にとってはそれほど深刻な問題ではなかったことも憶えておくとよい。

本書の翻訳はガレノスとガレノス主義の意味について日本人が考えるための重要な書物である。ガレノスの著作も京都大学出版会から続々と翻訳が進んでおり、日本でガレノス主義の理解が定着する素晴らしいことである。おそらく次のステップは、ガレノスの多方向の意味をハンディにまとめた著作集の刊行であろう。ヒポクラテスは岩波文庫から優れた選集があり、ガレノス選集は英語でも重視されている。このような選集が手に入ると、ガレニズムを軸に19世紀中葉までの長い欧米の歴史を考える人々にとって、大きな益となるであろう。

Galen. (1997). *Selected Works*. The World's Classics. Edited and translated by P. N. Singer. Oxford: Oxford University Press.

Hankinson, R. J. (2008) *The Cambridge Companion to Galen*. Cambridge Companions. Cambridge University Press.

Mattern, Susan P. (2013) *The Prince of Medicine: Galen in the Roman Empire*. New York, NY: Oxford University Press.

Nutton, Vivian. (2005). *Ancient Medicine*. London: Routledge, 2005.

(鈴木 晃仁)

[白水社、〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24、TEL. 03 (3291) 7811、2017年10月、四六判、384頁、4,800円+税]

日仏薬学会、日本薬史学会 訳

『薬学の歴史 くすり・軟膏・毒物』

伝統医学においても近代医学においても、医学と薬は深い関わりがある。伝統医学における薬はおもに植物性であり、それぞれの伝統医学によって用いる植物もまた処方も異なっている。我

が国では古来、中国伝統医学に由来する漢方薬が用いられ、明治以後にヨーロッパからもたらされた西洋近代医学では、植物から抽出されたり新たに合成されたりした化学物質が広く用いられてい

る。18世紀以前の西洋伝統医学で用いられていた薬は、我が国では歴史上ほとんど用いられたことがなく、現在においてはその情報はほとんど知られていない。

本書『薬学の歴史 くすり・軟膏・毒物』は、パリ・デカルト大学で編まれて2012年に刊行された“UNE HISTOIRE DE LA PHARMACIE: Remèdes, onguents, poisons”を日仏薬学会と日本薬史学会の協力により翻訳されたものである。原著は、中世・ルネサンスを専門とする歴史家でパリ・デカルト大学教授のイヴァン・ブローヤール Yvan Brohard により企画立案され、4名の専門家による4編の論文と、パリ大学医学図書館(BIUM)とパリ大学薬学図書館(BIUP)が所蔵する多数の資料の画像を収録している。西洋伝統医学の薬の概況について知ることのできる貴重な書籍である。本書の内容は以下のようになっている。

第1編「薬学、その起源から共和暦11年のジェルミナル法まで」はオリヴィエ・ラフォン Olivier Lafont により執筆されている。

- ・起源：古代メソポタミア／エジプト／古代ギリシャ・ローマ／ビザンティン時代、/[コラム：中世における傷の手当ての技法]
- ・職業の誕生と組織化：バグダッドのカリフとサイダリたち／西洋における薬剤師の誕生／共同体の規則、/[コラム：ベゾール（結石）とその他の異様な薬]
- ・医薬品の概念の根底にある学説：ヒポクラテスとガレノスの学説／医化学と錬金術医学／表徴説／多剤療法、/[コラム：交感説から表徴説へ]
- ・薬局方—薬学実践の柱、/[コラム：テリアカ、あるいは万能薬となった解毒剤の歴史]
- ・科学の発展における薬剤師の位置づけ：薬剤師と薬学教師—その職業に関する著者たち／薬剤師—化学書の著者たち／薬剤師とフランス科学アカデミー／薬剤師と教育
- ・生薬の剤形：内服薬の剤形／外用薬の剤形／新たな剤形
- ・薬剤師の道具立て：医薬品調製用の器具／医薬

品保存用の容器

- ・アメリカ大陸由来の新薬品キナノキ、対する四体液説、/[コラム：パルマンティエ、ジャガイモ、食物の化学、軍隊の薬学]
- ・自由主義経済か、公衆衛生上の安全か？

第2編「痛みと治療法—古代から啓蒙の世紀まで」はイヴァン・ブローヤール Yvan Brohard により執筆されている。

- ・痛みと治療法—古代ギリシャ＝ローマ時代：ホメロスからペリクレスまで／ローマ／エピクロス主義とストア主義、/[コラム：「栄光の手」またはマンドラゴラ]
- ・痛みと治療法—中世：中世／西洋中世への東洋の貢献／痛みへの抵抗／日常で治療される痛み、/[コラム：解熱用の動植物]
- ・痛みと治療法—ルネサンス期：新たな息吹／伝統という重荷
- ・痛みと治療法—17世紀：デカルトにおける痛み／17世紀イギリスと痛み／宗教と苦痛／治療法の選択と限界
- ・痛みと治療法—啓蒙の世紀：有益な痛みか、有害な痛みか？／痛みの治療：進歩と不確かさ

第3編「毒物と医薬品—主要な二学問の誕生：薬理学と毒物学」はベルナル・P・ロック Bernard Roques により執筆されている。

毒物と薬の間で—治療の混沌たる始まり／鉱物由来の有名な毒物と強力な薬／毒殺事件、または殺人における金属塩の使用、/[コラム：ヒュギエイア、ヘビ、杯]／薬と毒物の間にある植物：現代の医薬品の起源／アンデス高原から心臓の生理学へ：キナキナ粉末の見事な歴史／生存のための殺害：毒物と進化／ボツリヌス菌：橋渡し研究の象徴的事例—バイオテロからボトックスまで／人間が作った毒物とその使用法／解毒剤：薬理学の暗い始まりへの決定的な功績／薬学の飛躍的発展、植物の卓越した役割／生物学的標的の概念と用量効果の概念の誕生／薬理学史におけるヨーロッパの歴史的快挙：痛みの内因的制御

第4編「現代医薬品の発見：偶然，直観的発想，科学的方法に彩られた歴史」はフレデリック・ダールデルFrédéric Dardelにより執筆されている。

化学と産業の革新／エールリヒ博士の「特效薬」／サルファ剤／コカインからストバインへ：

見事な直観

(坂井 建雄)

[薬事日報社，〒101-8648 東京都千代田区神田和泉町1-10-2，TEL. 03 (3862) 2141，2017年10月，B5判，231頁，5,000円+税]

書籍紹介

編集執筆責任者：小曾戸洋，共編校訂者：町泉寿郎

『杏雨書屋所蔵 医家肖像集 二編』

本書は2008年に杏雨書屋開館30周年記念として出版された『杏雨書屋所蔵 医家肖像集』の続編として2018年3月に出版された。『初編』が発刊されて10年，この間新たに杏雨書屋に入架した肖像を中心に医家67名79点の肖像が掲載されている。『初編』の169名201点と合わせて総数198名280点に及ぶ従来になかった一大医家肖像集となった。

編集執筆責任者は，過去に出版された肖像集はその人物の略伝については記載されているがその肖像画の出自（由緒来歴）や体裁などが述べられていないことを指摘し，この『杏雨書屋 医家肖像集・初編，二編』ではそれらの知り得る詳細を記載している。

本書の作りは，まず「伝記」「分類番号」「揮毫年，原画・模写の区別等」「他所の所在等」「賛文・落款など」を記し，画像は「肖像画全体」「肖像の拡大」「賛文の拡大」をフルカラーで掲載するという手法をとり『初編』のそれを踏襲している。『二編』では「寸法・素材」についての情報が追加された。医家の肖像集として他に類を見ない質・量の情報を有した書籍となっている。

今回の肖像画の中で多くを占めるのは日本医史学会が所有していた38幅の肖像であり，漏水によりカビ・虫損など傷みの激しい開巻不能だったものも含まれている。1999年に『日本医史学会所蔵 先哲名医肖像（第100回位史学会総会）』

が発行されこれらの38点が掲載されているが，傷みの激しいものは略伝のみで画像は掲載されていなかった。これらの閲覧不能であった小石元瑞などの8巻も含め杏雨書屋に移管，修復され全38画像もこの『二編』に掲載されているのでぜひご覧いただきたい。

また華岡鹿城の御子孫に伝わった華岡青洲（自筆賛，南洋賛），合水堂を支えた華岡鹿城，南洋，積軒の肖像は新たに杏雨書屋に移管された原画であり一見に値する。その他『初編』から掲載漏れのものや新規購入の原画の肖像14点も掲載されている。

一方これまでの肖像集にはなかった肖像写真なども掲載されており，一瞬異質に思ったが「肖像とは特定の人物の容姿・姿態などをうつしとった絵・写真・彫刻。」とあり納得した。『二編』に森立之の写真が掲載されたが，『初編』の肖像画の模写の元となったものでどれ位似ているか比較して見てみるのも面白い。

因みに「吉益東洞」の肖像画は『初編』『二編』合わせて16点あり，それらを見比べてみると一様に「威厳があり鋭い眼差しで意志強固，雙鑠とする」，「江戸中後期の日本医界を風靡した古方派の筆頭」と「吉益東洞」のイメージができてくる。

過去の偉人を偲び，イメージするには「生まれ育ち，人となりや業績」と「風体，風貌またその